空手道部

自分で選んだ場所で、頑張ればいい。

寸止めの空手ではなく、直接打撃を行う武道としての空手を追求する古流剛柔空手。そんな空手を学ぶために集まった男女、24名。「空手道部」は三木町に本部をもつ古流剛柔空手の師範のもと、礼儀と心身の向上を掲げて日々鍛錬に励んでいます。

「人は肉体的にも、精神的にも限界を超えられる！」とは、高校時代から空手を習う次期部長・山浦伸好さん（法学部2年）。というのも、準備体操で体をならしたあとは、基本稽古、型、組み手を通して細かい技や連係技等々、月～木曜までの週4日、全身汗だくになるまで2時間たっぷり鍛えるのです。通常練習以外にさまざまなイベントがあるのもしかり。たとえば、新春早々行われる大的場での寒稽古。飛び上がるほどの冷たい海に入るこのイベントは、代々受け継がれてきた伝統行事のひとつだそう。流派が同じ徳島大学・徳島文理大学・四国大学との合同合宿も、かなり濃ゆ～いスケジュールで行われます。「イベント事が多いこともあって、みんなすごく仲がいい。でも、緊張感は常に忘れないよう心がけています」と、山浦さんと同じく法学部2年で文武両道を目指す吉本茂貴さん。個人が尊重される大学だからこそ、高校時代の延長線的なノリも楽しい。ですが、年1回の全国試合でも好成績を収めるなど、目指すものは真剣そのものです。

そんな真剣勝負は、毎年秋に行われる貫歩（かんぽ）からも伝わります。貫歩とは、徳島大学からここ香川大学までの約100kmを2日間かけて歩き抜く、なんとも過酷な一大イベント。でありながら、男女ともリタイア者ゼロ！「志度あたりが一番ピーク。後半はみんな無言で限界と戦います」「これが本当の『足が棒』です（笑）。でも、一緒に頑張ったあとの達成感はすごいですよ」。昨年の試合で個人2位を獲得した濱田康司さん（工学部2年）と、日本の武道に憧れて入部した宮脇潤さん（工学部2年）は自信を持って言います。今年の貫歩を目前に控えた取材日、スタートが楽しみだと言った部員たちは、ハードルを乗り越えた者だけが見せるいい顔つき…。うん、オトコマエです。男子も女子も、いろんな意味で“強くなりたい”と願い入部する初心者も少なくありません。技を磨き、伝統を継承する空手道から得るものとはいったい何でしょう？「選ぶ場所はどこでもいい。行った先でどう頑張るかが大切だ」。次期部長の名言は、きっとその答えを導いてくれるはずです。

夢中になれる場所がある幸福。

劇団 EMPTY エンプティ

幕が上がる。目の前には、スポットライトに照らされた特別な場所…。一瞬の静寂をやぶり、私たちの舞台がいま、動き始める―。香川大学が誇る劇団「EMPTY（エンプティ）」は今年で30周年。かつて何人もの学生たちが舞台上でアツイ演技を繰り広げてきた、歴史あるサークルのひとつです。そして現在、13名の部員たちをまとめるのは、座長兼演出担当の植田葉子さん（教育学部2年）。高校時代に熱中し、大学でも絶対演劇部と決めていました。「既製の小説や物語を元に演じることもありますが、部員たちで考えたオリジナルストーリーも大切にしています。どちらにせよ、どこかに“EMPTYらしさ”が感じられるものにしたいですね」と植田さん。悲劇的でもいい芝居はたくさんある。でも、舞台を見て楽しいと思う、そして笑顔になれる、それがEMPTYらしさ。役者のつくりあげる独特のキャラや個性ある演出が、多くの観客を魅了します。

練習は約3時間、火・木・金の週3日。土台となる筋トレと発声練習をこなした後は、立ち稽古や立ち回りに入ります。「アメンボアカイナ…もやりますよ、もちろん（笑）」。なるほど、やっぱり基本のようです。さらに「公演でよくオリーブホールを使わせていただきますが、自分たちの舞台以外でも照明をさせてもらったり、舞台をばらしたり。裏方的なことも実践で学んでいくって感じです」。公演が決まれば広告やパンフレット作りもこなすEMPTY。準備から片付けまで、すべて自分たちで作り上げるからこそ演劇にも愛があるのです。

撮影のロケ地としても盛んな香川県でエキストラに呼ばれることもありますが、基本的には春と秋の学祭、夏と冬の一般公演と年4回の舞台。現在は、12月18日（日）に行われるオリーブホールでの公演を目指し、台本と役作りに取り組んでいます。「自分がやりたいことに反して、演出ではこうだっていうのもあるんですよね。つらいときもあるけど、ひとつの舞台を目指すあの一体感は何ものにも代えがたい。フィナーレに拍手がわぁ～って響くと、涙が出ちゃいます」。元々は消極的な性格。でも、香川大学で自分を表現する場所、そして夢中になれることを見つけた植田さん。部員のほとんどが初心者からのスタートですが、感じる喜びは皆一緒なのです。いっぱい笑って、ちょっぴり泣ける…。舞台を通して観る“物語の楽しさ”、これから歩んでゆく“人生の楽しさ”は、劇団EMPTYから始まります。